
戦力外通告

ルガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦力外通告

【Nコード】

N8868Y

【作者名】

ルガー

【あらすじ】

「残念ながら来季は契約を結ばない意向です。」子供の頃から憧れだった野球選手。俺は無職になった…

ブローグ

満員の甲子園、1 - 0のまま迎えた9回裏。

1球1球にざわつきが起こる異常な緊張感が場内に漂っていた。

約4万5000人、その視線の先には左腕がいた。

その左腕は相手の選手を嘲笑うかのように三振の山を築いていく。そして、26個目のアウトも空振りの三振で飾った。

あと、一人…

捕手のサインに頷きながら打者と対峙する。

豪快なフォームから投げ下ろされる直球に打者もフルスイングで応えた。

鈍い音…ミットに球が収まる音だった。

伊藤道真^{いとうみちまこと}、甲子園優勝投手の誕生の瞬間であった。

プロローグ（後書き）

初心者で誤字、脱字などありますが温かく見守って下さると幸いです。

伊藤道真

「カキーン」

快音と共に打球はスタンドへと放り込まれた。

しかし、歓声は小さい。ここは二軍…俺が味わった甲子園決勝とは月とすっぽんだ。

甲子園優勝投手となった俺はドラフトで9球団競合の末、【横浜ベイスターズ】に入団。

万年最下位球団ということもありキャンプは1軍に帯同。

しかし、キャンプ中に肩を故障し離脱。その年は二軍戦にも1度も投げられなかった。

2年目は二軍戦で5試合先発し1勝3敗、防御率は5 / 60

3年目はオープン戦で結果を残していたが、打球を膝に食らい離脱。7月頃から、二軍で中継ぎを含め15試合に登板。0勝2敗、防御率は4 / 93

4年目も二軍スタート。本来の直球が投げられず12試合に投げ0勝7敗、防御率は6 / 46

5年目、23歳になった俺はまたしてもキャンプで肩を故障した。そして今、二軍で今季初登板し、本塁打を打たれてしまった…

もう9月の末だ。

【横浜スタース】は今年も最下位が確定してしまった。ちなみに100敗ペース…

二軍監督が投手の交代を球審に伝えに来た。

俺は投手コーチに球を渡し、足軽にロッカールームへと引き上げていく。

「つかえねえーな。」

投手コーチだが観客だ分からないが、はつきりと俺の耳に入る。その言葉に反応して、更に歩くスピードを上げる。

なぜだがマウンドが少しだけ恋しかった…

通告

篠突く雨の音のなか、俺はビニール傘を片手に持ちながら歩いていた。

昨日の夜にマネージャーから明日、球団事務所に来いと言われたのだ。

もうあれしかないよな…

事務所に着くとロビーに座らされ、暫くすると奥の部屋へと案内される。

そこには、他にも4選手がいた。いずれも一軍で活躍した選手ではなかった。

息が出来ないくらいの緊張感がそこにはあった。

甲子園決勝の心地が良いものではない、もっと残酷さや絶望感が漂っている。

トレード…いや、無いな…

必死に光を探していた俺らにGMが背後のドアから入ってきた。

貧相な顔立ちで今にも倒れそうな細心だった。俺らは自然と身体の向きをそちらへ変える。

「えー、残念ながら来季は契約を結ばない意向です。」

「…はつきり言って下さいよ。戦力外って…」

俺は低い声でそう言っていた。

覚悟をしていたはずだが、やはりショックだった。

その後、マスコミの対応など諸々の注意が説明される。

どの選手も頷きもしなければ表情を変化させることもない。

雨の音がただ呆然と耳に入った。

電話

残酷な雨が伊藤道真を襲っていた。

まるで自分を小馬鹿にするように雨は更に強くなっていく…

電話が鳴った。反射的にポケットから携帯電話を取り出す。
まつりか松浦奏かなでだった。中学の時に知り合った彼女だ。

「…もしもし。」

「伊藤君、戦力外通告って…」

奏が言葉を濁した。

最近はこのなに早く分かるものなのか、球団のツイッターかもしれない。

8

「おう。さっき伝えられた。」

「…大丈夫？」

「まだ実感無いな…、俺の野球人生…いや、人生終わったんだよね…。」

「…。」

両者共に黙ってしまった。沈黙をただ雨が笑っている。

「まだトライアウトとかあるじゃん、頑張つてよ。」

振り絞るような声で奏が言った。甘い声の彼女が擦れ声だった。

彼女は非の打ちどころがないような女性だった。その彼女が泣いている…？

『ツーツーツー』

ブツチと音がして、ワンテンが遅れて耳に入る。

ふいに空を見上げる。雨はまだやむ気配が無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8868y/>

戦力外通告

2011年12月3日18時51分発行